

紀元前六世紀後半期
スパルタの対外政策

新村
祐一
郎

筆者はかつて、スパルタにおいてはメッセニアの反乱の危険の皆無であった時期はあり得なかつたことを指摘し、この反乱が生じた場合には、アルカディア、アルゴスなどがメッセニア側に援助を与える可能性があることを強調した。それと同時に、前六〇〇年頃と推定されるメッセニアの反乱を鎮圧したのちに、スパルタがアルカディア諸都市を攻略したのは、メッセニアの同盟者となり得るものを自らの側に惹きつけ、これを防壁として、自己の安全を確保しようとする、いわば防禦的な要素の強い政策に出たものではあるまいか、と考えた。⁽¹⁾ スパルタは前五五〇年頃に外交政策を大きく転換した、といわれるが、それは要するに、この自己防衛的方向の帰結として生じたものであらうとの見通しを持っていたからである。

本稿では、その前五五〇年以降のスパルタの外交がどのような形で推し進められたかを探究し、外交政策の転換が果してあったか否かという基本的問題について、一応の結論を出すと共に、前六世紀末—前五世紀初頭におけるスパルタ王クレオメネス一世 (Kleomenes I) の対外政策を通じて、彼の目的とするところを見極めたい。そのためには、前六世紀後半におけるスパルタの動向と当時のギリシアを取りまく国際環境を把握しなければならぬ。したがって、まず、前六世紀の中葉の状況を観察する。

前六世紀前半におけるスパルタでは戦争が続いていたと見てよさそうである。前六〇〇年頃、スパルタでは市民に

平等者意識を植えつけることをひとつの眼目として、ホモイオイ (homoioi) という概念が使用された。このホモイオイ創出自身はスパルタの社会秩序の根本的変革をもたらすものではなかったが、市民達はホモイオイと呼ばれるようになった段階から、平時・戦時を問わず、軍事(訓練)に専念することになって、農耕はすべてヘイロタイ (heilotai) の仕事となった。したがって、ホモイオイの創出はヘイロタイの存在を前提として、はじめて可能だったのである。市民達をホモイオイと呼んで、互に平等者であるという意識を植えつけたのは、当時の軍制や戦術に関係がある。すなわち、きわめて厳格な団体的行動が要求されるホプリテス (hoplites) の密集隊を編成するに際しては、この意識がある程度まで有効に作用し得たに違いない。このホモイオイの創出こそ、スパルタ独特の体制——いわゆるリュクルゴス体制——の基礎であった。この体制の形成に直接的に関与していると思われる事件が前六〇〇年頃に推定されるメッセニアの反乱と前六世紀前半に行なわれたアルカディア南部を征圧し、服属せしめるための戦争であった。それを遂行するためには、多くの年月とともに、多くの兵員を要した筈である。青少年を国家の団体訓練の下に置くというスパルタ独自の教育法もこの恒常的な戦争状態にふさわしいものであり、戦争による人的損失を補ふ必要から編み出されたものである。しかし、この教育法は一朝一夕に効果のあらわれてくるものではなく、実質的には相当の年月が必要である。したがって、スパルタが常に強力な軍事力を保有し得るようになったのは前六世紀の中葉に近かったであろう。丁度その頃に、テゲアとの戦争で優位に立ち得たというヘロドトス (I. 67) の伝えは、これを最後にアルカディア征服戦争が終ることを暗示している。スパルタがアルカディア南部の諸都市を攻撃した目的はこれら諸都市のこれまでの行動を見た上でのことである。というのは、かつての第二メッセニア戦争の際に、アルカディアの諸都市がメッセニアを援助したからである。⁽²⁾ それ故、再度メッセニアがスパルタに反抗するようなことになれば、ふたたびア

ルカディアの援助があり得ると考えなければならぬのである。それを防止するためにはこの地方をスパルタの勢力下に置いておくことが是非とも必要だった。しかし、他方、スパルタにとってメッセニアに劣らず、否、むしろそれ以上に警戒しなければならないのは東隣のアルゴスであった。かつて前六六九年乃至六六八年にヒュンアイの戦で、スパルタはアルゴスから手痛い打撃を与えられている。しかも、それが第二メッセニア戦争のきっかけとなり、アルカディア諸都市のメッセニア援助も裏でアルゴスの要請があったと推定される。したがって、アルゴスを中心とするアルゴリス、アルカディア、メッセニアというラコニア地方を囲む三地方を分断しておかなければ、スパルタの安全は保障されない。そこで、スパルタが考えたのがアルカディアを味方に惹きつけておく方策であった。これによって、アルゴリスとメッセニアとの連絡を断つことができるからである。そのために、アルカディアに対しては硬軟両面の作戦が展開されている。すなわち、ラコニアに隣接する地方に対しては、おもに軍事力による圧迫によってスパルタの優位を認めさせる方針で進んでいる。これがアルカディア征服戦争に他ならず、その一環として、是非ともテゲアにスパルタの優位を認めさせなければならなかったのである。⁽³⁾ オレステスの骨の移葬はこの政策と結びついているといえよう。しかし、北部の直接ラコニアとは境界を接していない地方に対しては、むしろアルカディア人の反ドリス的感情を和らげることを基本方針とした。それが、いわゆる「親アカイア政策」である。そのために、スパルタ王家の系譜がアカイア系の英雄ヘラクレスに結びつくことを宣伝し、pre-Doriansのアルカディア系の人達との友好的な関係を期待しているのである。⁽⁴⁾

この対アルカディア政策は前六世紀中葉⁽⁵⁾エフォロイの一人に就任したキロン (Chiron) がアギス王家と結んで推進したものであろうと推察される。すなわち、パウサニアスはアギス家の王三代にわたってテゲア攻略に勢力を注いで

いる同じ時期に、エウリュポン家の方は平和を謳歌しているという伝承を語っているが、それが真実ならば、エウリュポン家の王は対アルカディア政策には冷淡であったことになる。ヘロドトス (I. 67) によると、スパルタがテゲアと戦って優位に立ったのは、アギス家のアナクサンドリダス (Anaxandridas) とエウリュポン家のアリスタン (Ariston) の時代だったという。また、キロンのエフォロス就任の時期などを考え合わせると、前六世紀の中葉はこの二人の王の支配時代ということができる。このアナクサンドリダス時代の対テゲア戦争にエウリュポン家が協力したか否か、ヘロドトスの記事からは明らかでない。ただ、この前六世紀中葉あたりから、次第に両王家の伝承に相違が見られなくなってくるので、時と場合によっては、協力体制もとり得る段階に到達していたと思われる。そして、その頃すでに、スパルタはギリシアの最強国と考えられており、リュディアのクロイソス王がスパルタに使者を送って同盟することを求めてきたのはそのためである (Herodotos I. 69) が、その時期にはすでにテゲアとの戦争は終わっていたようである。クロイソスの使者が来たのは前五五〇年頃と推定されるが、テゲアと戦ってこれを征服したのは、それよりも少し前であろう。

キロンはギリシアの七賢人の一人として名高い存在であるが、このキロンの年齢については、若干の史料から推定する以外に方法はない。ヘロドトス (I. 68) はキロンとアテナイのヒポクラテスとのオリュンピアにおける出会いを述べているが、その時期は明らかにペイシストラトス(ヒポクラテスの子)の誕生—前六〇〇年頃—以前である。キロンはその際ある奇跡を見て、ヒポクラテスに忠告を与えているというのであるから、キロンは前六〇〇年頃には、すでに成年に達してのちであったことが明確である。さらに、ディオゲネス・ラエルティオス (I. 72) によると、第五十二オリンピアード(前五七二年)には老年に達していることを示し、それと同時に (I. 68) 第五十六オリンピアード

(前五五六年)にエフォロスに就任したことを示している。この就任時の年齢について、ディオゲネス・ラエルティオスのいうところが正確であるならば、かなりの老境で、Huxley⁽⁵⁾は少なくとも七〇才には達していたと推定し、Klein⁽⁶⁾は七〇才乃至九〇才と見る。一方、前一五〇年頃のものと言われる、いわゆる Rylands papyrus 18⁽⁷⁾にキロンの名が見え、同時にアナクサンドリダスの名もあらわれる。このパピルスが如何なるものの断片であるかについての議論は絶えないが、これによって、キロンがエフォロスであった時、アナクサンドリダスが王位にあったことはほぼ確実である。⁽⁸⁾キロンの存命している間は、スパルタの対外政策が彼の指導の下に決定されたであろうと多くの論者は推定している。また、キロンとアナクサンドリダスとの間に、政策の上で若干の相違があったのではないかという意見もしばしば聞かれる。

キロンとアナクサンドリダスとが対立的であったとする見解の根拠にされるのはヘロドトスの記事(V, 39-41)である。すなわち「アナクサンドリダスはすでに結婚していたが、子が生まれないので、エフォロイが離婚して別の女性と再婚するように進言した。ところが、王が承知しなかったので、現在の妻もその地位にとどめたままで、別の女性と結婚するように、要するに、二重の世帯を営むように進言して、それを王に受けいれさせた」というのである。この記事はエフォロイが王の私事に対しても、アドヴァイスを行なって、事実上、王をそれに従わせるだけの権力を保有するようになったことを示すものに他ならないが、このようにエフォロイが強力になったのはキロンがエフォロスに就任している時に、その権力を伸張した結果であると考えられる。この時、エフォロイが獲得したのは政治的権能と裁判権であろう。ヘロドトス(VI, 56-57)によると、前五世紀のことではあるが、王による長老会や民会の主宰はすでに行なわれず、裁判権もきわめて限られた範囲になっていることが知られる。また、前記アナクサンドリダスに

関する記事のうち、V. 40 においてヘロドトスはエフォロイと長老達とが協議していることを述べている。これが定期的な正規の長老会であるかどうかは疑問であるが、このように王の処遇について、両者が協議して定めるといふことは、王の権限の低下とエフォロイの権力の上昇とを裏書きする。王の政治的権力の縮少は、単にそれだけにはとどまらず、エフォロイの私事への干渉さえ可能ならしめたのである。ヘロドトス (V. 41) はこのアナクサンドリダスの第二の妻をデマルメノスの子プリネタデスの娘と説明しているが、Huxley⁽⁴³⁾ はデマルメノスはキロンの子であることを暗示している。したがって、アナクサンドリダスの第二の妻はキロンの曾孫に当ることになる。Huxley⁽⁴⁴⁾ や Forrest⁽⁴⁵⁾ は共に、アギス家の中にドリス人の国家であるスパルタがキロンの主唱する「親アカイア政策」を採るのは好ましくないという気風があるので、キロンは敢えてその身内のものをアナクサンドリダスと結婚させ、自己の主張する政策を支持するよう彼に圧力をかけた、とし、キロンとアナクサンドリダスとの間に対立感情があったと断じている。そして、第二の妻から子が生まれたすぐあと、第一の妻から次々と三人の子が生まれたが、その三人の中の最年長のドリエウス (Dorieus) は第二の妻から生まれたクレオメネスと年齢的にきわめて接近していた。Huxley や Forrest はこの名に注目し、敢えてドリエウス「ドリス人」の意と名づけたのはアナクサンドリダスが、実際は「親アカイア政策」に反対であることの表明である、と説明している。クレオメネスの生まれたのは前五四五年頃ということで大方の意見は一致している。したがって、このいわゆる重婚をキロンによって企図されたものと見るなら、キロンは前五四五年の直前までは生存していたとしなければならない。

これに対して、Klein⁽⁴⁶⁾ はクレオメネスの誕生を同じく前五四五年頃としているが、クレオメネスがキロンの曾孫の子であるということから、キロンの誕生年を逆算し、一代を二五年とすれば、誕生年は前六四五年前後となるから、

エフォロスに就任した年にすでに九〇才になるし、一世代を二〇年としても、その年に七〇才となるため、それ以後、政界に影響力を長くは持ち得なかった、と断じ、キロンとアナクサンドリダスの対外政策に意見の不一致があったとしても、それが長期間には及び得なかった、と推論している。たしかに、キロンが前五五六年には七〇才以上に達していたことは充分推察されることである。しかしながら、重婚がキロン自身によって、直接は企図されなかったとしても、キロンの意を汲む当時のエフォロイによって、アナクサンドリダスに強制されたと考えられることはできる。

ところで、キロンの対外政策は第一に僭主政のポリスに干渉して、僭主を追放すること、第二に外交を攻撃・征服型から友好・同盟型へと転換したことで、以上二点があげられる。スパルタが何故僭主政を嫌ったのか、その理由はいろいろ考えられるが、前七世紀後半にコリントス、シキュオン、エピダウロスに非ポリス系の僭主があらわれ、その反ポリス傾向にアルゴスが神経をとがらせたのと同じように、僭主政がしばしば反ポリス傾向を示す可能性があったことに對する警戒の意味があったと思われる。そして、その反ポリス感情が、アルゴスが強力であった時代には反アルゴスという形をとってあらわれたが、スパルタが強化されてくると、それが反スパルタへと転換することも予想される。これはスパルタがアルゴスに對して優位に立った場合に、最も可能性が強く、したがって、近い将来アルゴスと對戦することを意図していた前五五〇年代に、スパルタが對僭主政策を立てていたとしても不思議ではない。それがまた、第二の外交方針の転換とも結びつく。この方針転換は、かつて論じたように、征服を続けると、スパルタ社会の中に生ずるであろう不安、すなわち、ヘイロタイの増大にともなうスパルタ市民の不安をより高めないための政策でもあったが、その方針と一致する「親アカイア政策」も、要するに、アルカディアとその周辺における反ポリス的な僭主政の成立をできる限り抑えようという意図から出たものなのである。このようなプログラムがすべてキロン

よって案出され、遂行されたか否か、その点は、にわかには断定できないが、少なくとも、アナクサンドリダス及びアリストンの時代に、この方針に全く相反する政策はとられていないように思われる。そして、キロンの引退または死去後は、対外政策の決定権はアナクサンドリダスの握るところとなったようである。

外交政策の転換は、したがって、前五五〇年代にキロンの主導下に行なわれたと推定することができるが、ただ、かつて考察した如く、そのための準備作業はすでに行なわれていた。その準備がすべて完了し、実行可能となつていふことを見抜いたのがキロンで、ここにおいて、アルカディア南部を支配下に置き、メッセニアを孤立させるといふ形で、スパルタはペロポネソス南部の覇権を握つたのである。この状態でスパルタにとって最も危険な存在はアルゴスであった。したがって、前五五〇年以後、間もなくアルゴスとの対戦があるが、スパルタの意図はアルゴスを弱体化することであつて、これを支配下に置くことは考えていない。それ故、スパルタはペロポネソス南部を防禦する体制をととのえることを最大の眼目としており、この範囲を自己の直接の勢力圏としたのである。つまり、この体制は外への攻撃を目指す姿勢ではなかつたのであり、「親アカイア政策」もスパルタがアルカディア全土を征服することを目指すのではなく、文字通り、友好関係を維持することをうたったものといえる。しかしながら、事実上、前五五〇年頃からスパルタはペロポネソス内の最強国であり、実質的にはペロポネソス全体の指導者的な立場にあつた。では、キロンの主導の下に決定されたと思われる対外政策の姿勢がそのキロンの死後にどういふ形で維持されたであろうか。

スパルタがテゲア攻略に成功したのち間もなく、クロイソスより友好同盟を求める使者が到着した。スパルタはこの申し入れを受け入れたが、ヘロドトス (I. 69) によると、スパルタの北方のトルナクスに祀られるアポロン像を造るに際して、要する金を、かつてクロイソスが無償で提供したことに對する返礼の意味が含まれていた、という。その上、スパルタは巨大なブロンズのクラテルをクロイソスに贈るべく送り出したが、結局、これはクロイソスの手にはとどかなかつたことをヘロドトス (I. 70) は伝えている。

以上の記事はリュディアとスパルタの間にすでに友好関係があり、交易なども行なわれていたことを暗示する。スパルタの交易範囲を知る手がかりとなる陶器やその破片の流布状況を見ると、黒絵式盛期 (Laconian III & IV) に最も広範囲に及んでいるが、その時期というのは Cook²⁰⁾ によれば前五八〇年頃から前五二五年頃に当り、小アジアでもスミルナ、ピタネ、ペルガモン、ゴルディオンと共にリュディア王国の首都サルディスでも出土しており、リュディアとスパルタとの交易のあつたことが裏書きされる。また、当時、リュディアのファッションがスパルタ女性にもてはやされていたことが明らかであるし、²¹⁾ 前七世紀の後半、スパルタで活躍した抒情詩人アルクマン (Alkman) をリュディア出身とする説も古くから存在する。²²⁾ このように両国の間には、ある程度の文化的交流のあつたことが認められ、友好同盟が結ばれたのもこのような背景があつたからである。

その後、スパルタはアルゴスとの戦争に突入している。その年代を確定するのは困難であるが、Tyrnbee, Klein²³⁾ などは前五四七年を主張し、Hammond, Huxley, Forrest²⁴⁾ などは前五四六年と推定している。この戦争は以前からスパルタとアルゴスとの係争地であつたテュレアティスをスパルタが占領したために起つたものであるが、両国は話し合いの上で、三〇〇人づつ戦士を出し合つて対戦し、勝利を得た方がテュレアティスを獲得することになった。け

れども、その結果は両者とも自己の勝利を主張して譲らなかつたため、結局、両国軍の全面的衝突となり、スパルタの勝利に終つたが、双方とも犠牲者は多かつた、という (Hdt. I. 82)。そして、これは、単にテュレアティスの獲得のみならず、これまではアルゴリスの一部であつたテュレアティスより南のバルノン山脈の東側からマレア岬の沖合一〇キロメートル足らずにあるキュテラ島さえも、スパルタ側にもたらされる結果になつた。ヘロドトスがこの戦争のことに言及するのは、クロイソスの救援要請の時期と関連してのことである。すなわち、彼はキュロスによつて、サルディスが包囲されたので、同盟国に即刻、救援に来るよう要請しているが、その時、スパルタはアルゴスとの対戦の最中だつた。しかし、それにもかかわらず、リュディア救援のために軍を送ろうとした時、サルディスが陥落し、クロイソスが捕えられたとの報に接し、出兵をとりやめた、という。 (Hdt. I. 83) そうすると、テュレアティスをめぐるアルゴスとの戦争と、キュロスの攻囲によるリュディア壊滅とは同時期ということになるが、テュレアティスの戦で相当の犠牲を払いつつあつたスパルタが小アジアまで救援におもむくだけの余力を持つていたであらうか。したがつて、Klein はスパルタには、本来、同時にふたつの戦争を遂行する意志はなかつた、と推論している。しかし、ヘロドトスの伝える如く、クロイソスへの救援軍を急派するだけの余力があるならば、派兵を断念したのち、その兵力を対アルゴス戦に注ぎこみ、それがアルゴスに対するスパルタの圧倒的勝利（バルノン山脈の東側の獲得など）に連らなつたのではなからうか。

ところで、以上のスパルタの対アルゴス戦は、アルゴスを破壊したり、アルゴス全体を瓦解させることを目指したのではなく、アルゴスを弱体化し、同時にペロポネソス南東部を獲得して、スパルタの防禦体制を完成することにあつたのである。アルゴリス全体を支配下に置くことは、スパルタにとっては重荷になる筈で、このような意図は毛頭

なかつたと思われる。アルゴスを弱め、危険な存在でなからしめながら存続させる方がスパルタには得策だったのである。その点から見ると、この戦争の結果は満足すべきものであり、当面、これ以上スパルタ安泰のための征服は不必要となつたのである。こうしてスパルタは、一方で防禦体制を確立し、同時に、強力な軍隊を保持する国家となつたのである。そして、アナクサンドリダスとアリストンの二人が支配していた時代、ギリシア本土におけるスパルタの軍事行動は、アルゴスとの戦争以後、ほとんど見られない。したがって、キロンの対外政策は、その限りにおいては、この時代には継承されているようである。もっとも、その一部をなす「親アカイア政策」の継承は、先に見たドリエウスの命名などと考え合わせてみると、あまり熱心には行なわれていなかったであろう。しかしながら、この政策は攻撃・征服から友好・同盟へという方針の中に包括されているということもできよう。

以上のように、キロンの対外政策はある程度継承されていたが、キロンの政策で問題にされているのは対ギリシア本土の関係である。スパルタは前六世紀中葉においては、ギリシア最大の海運国のひとつであった。ただ、これは軍事行動をとまなうものではなく、純然たる商業活動であった。スパルタ(ラコニア)はその地理的位置からエーゲ海とイオニア海を通じて東西の貿易が行なわれた可能性が強く、また、事実、東は小アジア、西はイタリア南部に達している。ところが、Huxley⁶⁰⁾はスパルタには前六世紀に海軍が創設され、貿易港が軍港として使用されるようになったため、次第に港は貿易から後退し、同世紀末には、貿易港として機能し得なくなつた、としている。ペルシア戦争の時に、スパルタに海軍があつたことは明らかであるが(Hdt. VIII. 131)⁶¹⁾では、海軍の創設はいつだったのであろうか。Toynbee⁶²⁾は、前五四四年頃のアルゴスに対する勝利以後のスパルタをおびやかすものとして、第一にヘイロタイの非妥協的態度、第二にアルゴスの覇権回復の熱意、第三にキュテラ島の領有をあげている。ヘイロタイがスパルタ

市民に反抗的態度をとるのは、とくにこの時期に限らず、いわば恒常的に見られるものだが、アルゴスの覇権への執念ともいべきものも、フェイドン以来続いているともいえる。アルゴスの立場からすれば、この覇権獲得に対する最大の障害はスパルタの強大化であった。したがって、この両国は、常に対立関係にあったといっても過言ではなく、前六世紀中葉にスパルタが優位に立ったといっても、それが継続したわけではない。両国の抗争はこののちも、機会あるごとに、行なわれている。ところで、問題は第三のキュテラの領有である。ヘロドトス（VIII, 235）はデマラトスがクセルクセスに語ったこととして、かつて、キロンがキュテラについて、海上にあるよりも海中に沈んでいた方がスパルタにとっては有利だ、と述べたことを伝えている。たしかに、有力な海軍を持っている国がスパルタを攻撃した場合、この島の防備はきわめて困難となるし、いったん敵の手に落ちた場合には、スパルタを攻撃するのに最もよい基地となる。したがって、キュテラの領有はスパルタの領土が増大したというよりも、むしろ、危険が増大する結果となるのは確実である。このキュテラ獲得の時期について、確実には明らかにできないが、テュレアティスをめぐる戦い以後であることは疑なく、前五四〇年代の中頃がプロバブルである。このキュテラをスパルタが獲得し得たということはスパルタに、すでに海軍が存在したことを暗示している。Huxley⁸³と Klein⁸⁴は、クロイソスの援軍急派の要請をうけて、直ちに援軍をサルディスへ向けて送り得るといふことから、この段階で海軍をすでに保有していた、と推察している。たしかに、スパルタは以前から海外との貿易を盛に行なっていたから、海上への進出そのものが初めての経験ではなかった筈であり、貿易船がそのまま軍船にはならないとしても、海軍の創設には、それほど長期間の準備はいらなかったのではなからうか。リュディアへの援助急派が可能だといふのであれば、それ以前に、すでに海軍への準備が完了していた、と見なければならぬ。ただ、それ以前の段階では、海軍の必要性は、とくに

なかったように考えられる。しかし、一方、スパルタはリュディアのクロイソスと友好同盟を結んだ時点で、小アジアへの派兵もあり得ることを予測したであろうし、そのための軍船の必要性にも気づいていたであろう。とすれば、海軍の創設のきっかけをつくったのは、まさに、海外に同盟国を持ったためであるといえることができる。

スパルタがサルデイスへ送るつもりだった援軍も出発前にサルデイスの陥落の報がはいったので中止された。これで軍隊を対アルゴス戦に集中し得るようになり、スパルタにとって有利な状況が現出した。この戦争の結果と考えられるキュテラ獲得には、やはり海軍の存在が前提となる筈であるが、その海軍は、本来はリュディア援助のために創設されたものと考えることができるとは、したがって、その海軍による軍事行動は、事実上、キュテラの占領が最初ではなかったかと思われる。

Klein⁵⁶⁾ はエジプト王アマシスが、スパルタに鎧を贈ったというヘロドトスの記事 (III. 45) から、これはアマシスがスパルタ・エジプト・リュディアの三国間の同盟を望んでいたことを示唆する、といっているが、エジプトとスパルタの直接的な交渉があったのは事実であろう⁵⁷⁾。しかし、それ程密接でなかったことも、同時に知られるのである。すなわち、ヘロドトス (II. 178) は、アマシスがギリシアからの渡航者に与えた土地に、ギリシア人がヘレニオンを建てた時、協同で建立したギリシアの諸都市の名を列挙しているが、その中にスパルタは含まれていない⁵⁸⁾。しかも、そのヘレニオンの共同所有権を持つ都市だけに、取引上の特権を与えたというのだから、スパルタは全く特権を与えられていないことになる。また、ヘロドトスは、ヘレニオンとは別に単独で神殿を建てたものとして、アイギナ人（ゼウス神殿）、サモス人（ヘラ神殿）、ミレトス人（アポロン神殿）をあげているがスパルタ人は神殿を建てていない。しかしながら、ナウクラティスから発見されるラコニアの黒絵式陶器⁵⁹⁾は少なくない、といわれるが、これらの陶器のす

べてが、直接スパルタからもたらされたとは限らないと思われる。アマシスはギリシア各地の神殿にさまざまな奉納品を献上しているし、デルフォイ神殿再建のために巨額な拠金もしている (Hdt. II. 180)。アマシスがスパルタに贈った鍔―実際はサモス人に略奪されて、目的地にはとどかなかつた―と同種の鍔をロドス島のリンドスのアテナ神殿に奉納しているから (Hdt. II. 182)、スパルタへのものも、あるいは神殿への奉納品ではなかつたかと思われるのである。とにかく、この以外にアマシスとスパルタとの関係を推察させるものはないが、アマシスは、あるいはスパルタに海軍のあることを知り、同盟を思い立ったこともあつたかもしれない。しかし、スパルタ側は、ことに軍事的な意味でエジプトと同盟を結ぶことが有益だとは考えていなかったのではなからうか。スパルタの方からエジプトに接近するかのようない行動は何も行なわれていないし、リュディアとの同盟さえも、同盟締結においては、スパルタは受動的であり、いまだ、小アジア側の国際関係に自らを積極的に組み入れようという意図は見られない。しかし、まさに丁度その頃から、スパルタは小アジア沿岸やその周辺の島々へある程度の関心を向けざるを得ない状況に置かれたのである。

小アジア沿岸のギリシアの植民都市は北から南へアイオリス人、イオニア人、ドリス人によって建設されていたが、リュディアはクロイソスの治世になってから、これら諸都市を支配下におさめるようになった⁶⁸ (Hdt. I. 6)。リュディアがペルシアのキュロスによって亡ぼされると、イオニア地方とアイオリス地方の諸都市の住民はペルシアの脅威を感じて、防備を堅固にするだけでなく、スパルタに援助を要請すべく、使者を送つたが、スパルタはこれを拒否して、軍事的な援助を全く行なおうとしなかつた。しかしながら、スパルタは、その後すぐに、五十橈船を小アジア沿岸に派遣しており、これはペルシアとイオニアの情勢を、直接自身で探るためであつたらしい。その際、スパルタはラク

リネスなる人物をサルディスのキュロスのもとに送って、ペルシアがギリシア領内を犯すならば、スパルタはそれを黙認することはない旨を伝えている。以上のイオニア人の動向とスパルタの対応はヘロドトス(Herodotus)にもとづくが、もしこれが事実ならば、すでにこの段階で、スパルタはペルシアと外交交渉をもったことになる。しかし、当時、ペルシアは小アジア沿岸にしか関心はなかったため、スパルタとの敵対関係には至らず、また、バビロンの攻略にむしる情熱を傾けていた(Hdt. I. 150 ff.)。スパルタ側としても、リュディアを破り、今やイオニア、アイオリス地方をも支配下に置こうとしているキュロスなる人物とその支配体制を知るために五十橈船を派しているため、ペルシアとの直接の敵対などは考えていない。ただ、この段階で、スパルタが小アジア沿岸にまで船を派遣しているのは、小アジアの情勢に無関心でいられなくなったことを意味している。その理由が奈辺に存するにしても、陸上における自国の封鎖的傾向とは全く対象的に、海上においては、遠く隔てられた地域にまで積極的に進出している。しかも、それが貿易を目的としたものではないことは明らかである。それはスパルタがエーゲ海圏への影響力を強化しつつある現象に他ならないが、以前は主として商業的利益のみを求めたものが、何故軍事的優越を強調するようになったのか、その転換の事情は明らかでない。しいて推論すれば、リュディアの滅亡によって当然予想されることであるが、スパルタは小アジアとの交流が弱まり、ひいては、エーゲ海圏に対する経済的な影響力が減少するのを恐れて、それを軍事的な力でカバーしようとしたのではないであろうか。しかしながら、スパルタのエーゲ海圏への軍事的進出は、根本的には、リュディアのクロイソスとの間に結ばれた友好同盟にあったと思われるが、スパルタには、当時、対キュロス、対ペルシアなどという、はっきりとした意図はなかったであろう。その意味でも、この時点で、エジプトのアマシスと同盟関係にはいることは考えられないのである。

一方、スパルタの援助を得られなかった小アジア沿岸のイオニア、アイオリス地方の諸都市は、前五四〇年までに、事実上ペルシアの支配下にはいったが、ある程度の自由を保持しつつ、ペルシアに臣従している僭主の下で、経済的活動は行なっていた。スパルタがイオニア地方に関心を持つのは、エーゲ海圏を安全ならしめるために、沿岸の島々がペルシアに服する前に、これをスパルタの影響下に置き、エーゲ海をスパルタの内海の如きものにしたという希望を持つ故である。しかし、これは貿易を保護するためではなく、むしろ、ペルシアを大陸に封じ込め、エーゲ海の島々やギリシア本土へその影響力が及ぶのを防ぐためであったようである。Huxley⁽⁴²⁾によると、前五五〇年からの二十五年間に、スパルタの輸出品の得意先ともいべき地の大部分はアテナイの進出によって失なわれた、という。また、Cook⁽⁴²⁾によると、アッティカの黒絵式陶器の流布範囲は、前六世紀から急速に拡大し、エーゲ海の島々や黒海方面の植民都市にまで及び、そのほか、エジプトのナウクラティス、西方のエトルリア方面にまで達している。したがって、前六世紀はギリシア本土の交易の中心がスパルタからアテナイへ移りつつあった時代であるが、また、前六世紀後半はスパルタの海軍がエーゲ海で最も活躍した時代であったといえよう。しかし、Klein⁽⁴³⁾もいうように、前五四六年以降約二〇年間、スパルタの対外関係は史料的にはあとづけられない。つぎにスパルタが登場するのは前五二五年頃のサモスとの関係である。前五二五年はまた、キュロスのあとを継いだペルシアのカンビュセスがエジプトを攻撃し、滅亡に追い込んだ年でもある。⁽⁴⁴⁾

エジプトの王アマシスは前五六九年頃王位についたが、彼の治世は、キュプロス島を占領するなど勢力は盛であった（Hdt. II. 182）。しかし、彼の治世は概して平和だったといわれている。アマシスは非常に親ギリシア的な人物であり、ギリシア各地の神殿への奉納品が多くあったことはすでに触れた通りである。彼はペルシアの勢力が強いのを知

り、リュディア、サモス、バビロン、キュレネなどと同盟関係にはいって、これに備えたが、間もなくリュディアが亡ぼされて小アジア全域がペルシアの勢力下にはいり、前五三九乃至五三八年にバビロンが占領されてシリアとパルステイナの支配権もペルシアの手に移った。こうして、次第にペルシアはエジプトに迫っていたが、そのエジプトと友好関係にあったのがサモスであった。サモスでは、前五四〇年頃、地主階級出身のポリュクラテス (Polykrates) が兄弟のパンタグノトスとシュロソンと共に支配権を手にいれたが、その後パンタグノトスを殺し、シュロソンを追放して、ポリュクラテス一人が僭主として前五三二年からこの島を支配した。⁽⁴⁷⁾ エジプトのアマシスがサモスと同盟を結んだのはこのポリュクラテスの治世であるが、当時サモスは非常に強力な海軍を所有しており、その掠奪行為とともに有名であった。⁽⁴⁸⁾ (Hdt. III. 39)。しかるに、ポリュクラテスは他方において、エジプトを攻撃しているカンビュセスにも助力を行なっている面がある。すなわち、カンビュセスがエジプトを攻撃するに必要な海軍の派遣を求めると、四〇隻の三段橈船に、ポリュクラテスに対して反乱をおこす可能性のあるものばかりを乗せて派遣し、カンビュセスには、彼らを帰国させないように、と依頼した。つまり、ポリュクラテスは国内の不穏分子 (ポリュクラテス反対派) を外へ送り出し、自らの政権を一層安泰ならしめる絶好の機会を得たのである。しかるに、この四〇隻の三段橈船は、結局エジプト攻撃には参加せず、サモスに帰航したが、ポリュクラテスの迎撃にあつたので、スパルタに逃れて援助を求めた。そこで、スパルタはその要請に答えて、サモスのポリュクラテスを攻撃することになった (Hdt. III. 45-46)。スパルタが要請に応じた理由として、ヘロドトス (III. 47) は次のように説明している。すなわち、逃れてきたサモス人いわせれば、かつてメッセニア戦争の際、⁽⁴⁹⁾ 海軍を送ってスパルタを援助した、その返礼であるというが、他方、スパルタ人いわせれば、スパルタが以前クロイソスに贈ったクラテルやアマシスからスパルタに贈られた鎧が、いず

れも、サモスによって掠奪されたことに對する報復という意味を持っていた、としている。しかし、これらは、すべて、現政権のポリュクラテスとは関係のない、以前の話であり、本当の遠征の理由は、むしろ、他にあったと考える方が妥当であろう。

スパルタはポリュクラテスがアマシスと同盟し、ペルシアと對抗する姿勢をとっている間はサモスに干渉する意図はなかった。しかし、ポリュクラテスに親ペルシア的な行動があるのを知ると、サモスの攻撃にふみ切ったと思われる。小アジア沿岸の島サモスが反ペルシアの旗印を鮮明にしている限り、その海軍力によって、エーゲ海はギリシアにとって安泰であるが、サモスがペルシア側についていた場合は、海軍力はペルシアの利用するところとなり、ペルシアにエーゲ海進出の機会を与えることになる。したがって、スパルタとしては、反ポリュクラテス派を政権につけ、反ペルシアの点で協調して行くことを期待して、彼らを支持し、援助したのである。なお、このスパルタのサモス攻撃にはコリントスの援助もあった。ただ、コリントスのサモスに對する敵意を説明するヘロドトスの記事（III. 48）には混乱があり、若干の校訂を行なっても、十分満足すべき解釈は得られないが、とにかく、この時期（前五二五年頃）にコリントスが何らかの理由でサモスに敵意を持っていたことは否定できないであろう。かくして、スパルタはサモスの反ポリュクラテス派の要請に應じて、ポリュクラテスを攻撃することになった。ヘロドトス（III. 54-59）の述べるところによると、スパルタは大軍をもって、サモスの町を四〇日にわたって包囲したが、結局、攻略し得ずに引きあげた。したがって、反ポリュクラテス派のサモス人達も、サモスへの帰還をあきらめて、まず、シフノス島を攻略し、更に、アルゴリス地方の南東部に程近いヒュドレア島を獲得し、彼ら自身はクレタ島西部のキュドニアに居住した、という。このヘロドトスの記事から明らかになることは、当時のサモスの海軍力がきわめて強大であったということ

である。反ポリュクラテス派のサモス人は、その後（前五二〇年頃）アイギナの攻撃をうけているが、それも、かつてサモスがアイギナを攻撃したからだという。このサモスのアイギナ攻撃はいつの事件か明らかでないが、サモスの海軍力がギリシア本土の近辺にまで及んでいることになり、エーゲ海における大勢力となっていたことが知られる。すると、スパルタがエーゲ海圏への影響力を保持しようとすれば、当然、サモスの勢力と衝突する筈である。おそらく、サモスはリュディアが滅亡した頃から、海軍力を増強し、ペルシアに備えると共に、エーゲ海全域に進出して、スパルタとの海上権をめぐる争などもあったものと推定される。スパルタのサモス攻撃には、このような要素も絡み合っていた可能性もある。スパルタの対外政策については、前五三〇年代を中心に不明な点があるが、前五二五年頃には、海上においてサモスの優位が認められる。しかし、スパルタがサモス遠征に大軍を派遣したというのであれば、スパルタの海軍力もサモスに次ぐだけの力を持つものではなかったかと思われる。

スパルタは以上のサモス攻撃とほぼ時を同じくして、ナクソス島の僭主でポリュクラテスと親しいリュグダミス(Lygdamis)のもとに使節を派遣しているが、会谈をする機会を得ず、この僭主政権を倒したという。その時期は明らかでないが、Huxley はエウセビオスの海軍力のリストにもとづいて、ナクソスを攻撃したのは前五一七年から前五一五年の間と見ており、Klein もそれに同調している。しかし、それに対し、エウセビオスのリストの内容に疑問を持つ Cartledge は、リュグダミスの廃されたのは前五二五年としているが、ほかに、前五二五乃至五二四年頃と推定するものもある。そして、前五二五乃至四年説はナクソスの攻撃がサモスの攻撃の直後と見ることに基いている。Klein は前五一七―五一五年を主張する根拠として、クレオメネス即位直後のドリエウスの航海出発をとりあげ、このような航海をなし得る可能性はスパルタの制海権の確実さを物語るもの、としている。クレオメネス一世の即位

年代は前五二〇年頃とされているから、ドリニウスの航海がその頃行なわれた可能性はあるが、それが制海権と結びつけられるかどうかは疑問である。

ところで、ヘロドトス (III. 120-125) の伝えるところによると、その後、ペシルアの支配下にあるリュディアの総督オロイテスがポリュクラテスの殺害を目論み、彼をリュディアに招き、それに応じてマグネシアに到着したポリュクラテスを殺した（前五二二年）。これはペルシアがサモスの制圧を目指していることを思わしめる事件であるが、ペルシアはこの当時、カンビュセスの治世の末年で、国内は混乱をきわめていた。すなわち、ガウマタという男が王カンビュセスの弟スメルディオスであると偽称し、カンビュセスがエジプトに遠征し、同地にとどまっている間に、自ら王と称したのである。次いで、カンビュセスが死去すると、このガウマタを支持するものと、王家の傍系のダレイオスを支持するものとの争が激化し、紛争は約二年続いた (Hdt. III. 61 ff.)。その間に、オロイテスはリュディアを中心に勢力をたくわえていたが、ダレイオスは紛争がおさまると、オロイテスの親衛隊に命じてオロイテスを殺害させた (Hdt. III. 126-128)。一方、ポリュクラテス亡きあと、サモスを支配していたのはポリュクラテスの下で秘書を務めていたマイアンドリオスであったが、かつてポリュクラテスに追われて国外に去った弟のシュロソンはエジプトでダレイオスの知遇を得た。その後、ダレイオスがペルシアの王となると、シュロソンはペルシアの力を利用してサモスの支配権を獲得せんと目論み、それを王に求めた。かくてペルシア軍はサモスを占領し、それをシュロソんに引き渡したが、実質的には、この時をもって、サモスはペルシアの支配下にはいったのである。これが前五一七年であるが、エウセビオスのリストによると、この年に制海権はサモスからラケダイモンに移ったことになっている。なお、マイアンドリオスはスパルタに逃れて援助を求めたが応じられず、追放された (Hdt. III. 139-149)。

ところで、サモスがペルシアの支配下になると、サモス対スパルタのエーゲ海の支配権をめぐる対抗関係にペルシアが関与してくる。しかし、スパルタはマイアンドリオスを援助しなかったので、この時点では、スパルタはサモスと明確な対立関係には立ち至らず、したがって、ペルシアの脅威を直接感ずるまでには至っていない。しかし、今後はペルシアの脅威を無視して外交方針を定めることは、もはや、不可能になってきていることを識者は感じたであろう。

アギス家では前五二〇年頃にアナクサンドリダス王が死去し、クレオメネス一世があとを継いでいる。⁽⁶⁾とすると、ナクソスのリュグダミスの廢位の時期をサモス攻撃とほぼ同時と見れば、それはアナクサンドリダスの治世となるが、前五一七年頃とすれば、それはクレオメネス一世の治世と考えてよさそうである。

四

アナクサンドリダスの治世は前五六〇年頃から前五二〇年頃までとするのが諸家のほぼ一致するところであるが、前五五〇年乃至前五四五年から、海上への進出が積極的に行なわれるようになった。これは、リュディアとの同盟にもとづいて創設されたと思われる海軍の活動によるものであることはいうまでもないが、これはキロンの定めた対外政策のプログラムには全く含まれていなかったことといえる。この海外への軍事的進出がアナクサンドリダスの意図にもとづくものであるならば、アナクサンドリダスとキロンの外交方針は一致しないといえるであろうか。これはきわめて複雑な問題である。

僭主政のポリスに対するスパルタの干渉について、プルタルコス⁽⁷⁾はコリントスのキュプセリダイ、ナクソスのリュ

グダミス、アテナイのペイストラティダイ、シキュオンのアイスキネス、タソスのシュンマコス、ミレトスのアリストゲネス等々を列挙しているが、この中で、スパルタの干渉によることが明らかなものはシキュオンとアテナイの場合だけである。また、コリントスに関しては、おそらくはプルタルコス(64)の誤で、アリストテレスはキュプセリダイ(65)の終末に関して、スパルタの干渉については全く述べておらず、その年代が前五八三年頃である点から考えても、キロンがエフォロスに就任するかなり前の事件なので、スパルタとは無関係と断じてよい。シキュオンのアイスキネスは丁度キロンがエフォロスの頃であり、おそらく、キロンによる僭主政ボリスへの干渉の最初の例である。とすると、アナクサンドリダス時代には、その他に僭主政への干渉はサモスのポリュクラテスとナクソスのリュグダミスの場合だけである。けれども、サモスの場合は僭主政であるが故の攻撃とは考えられず、むしろ、先に述べた如き理由の敵対関係が主であろう。ナクソスの場合は、あるいは、クレオメネス時代にはいつているかもしれないが、かりに、アナクサンドリダス時代としても、僭主政云々よりも、ナクソスの海軍力に注目したためであり、この島がペルシア側に荷担することを恐れ、親ギリシア派の政権を樹立する必要を感じたからであろう。ちなみに、エウセビオスのリストによると、ナクソスの制海権は前五一五年から一〇年間となっているし、ヘロドトス(V. 2834)も、前五世紀初頭のイオニア叛乱以前には、ナクソスとミレトスが最富強で、ナクソスはペルシア軍の四ヶ月に及ぶ攻囲にも屈せず、遂にこれを撤退させるだけの力を持っていたことを叙している。以上のように見てくると、アナクサンドリダスは、直接的には、僭主政体の故の攻撃はしておらず、キロン主唱の僭主政の故にこれを打倒するという方針をうけついではない、といってもよさそうである。そして、このアナクサンドリダスの方針は、次のクレオメネスの治世にも踏襲されているように思われる。

他方、征服政策から同盟政策への転換は、いわゆるペロポネソス同盟と関係のある問題であるが、スパルタ人が征服しながら、その住民をヘイロタイ化せず、友好関係を樹立したのはテゲアの場合が最初である。その際、「メッセニア人を国内から追い出し、彼らを厚遇しない」ことが条件となっていたが、これがそのうちペロポネソス諸国がスパルタと同盟を結ぶ場合のモデルになったようである。これとともに、いわゆる「親アカイア政策」にもとづくオレステスの遺骨のスパルタ移葬とあいまって、アルカディア諸都市は次々とスパルタと同盟関係を結び、スパルタはペロポネソスにおける覇者の観を呈していたようである。ヘロドトス(Herodotus)がオレステスの遺骨移葬問題とも関連させつつ、ペロポネソスの大半はスパルタによって、すでに征服されていると述べ、そのことをクロイソスが知ったというのであるから、このような状態は前五五〇年頃には完成の域に近づいていたようである。したがって、これをもつて、ペロポネソス同盟の起源とする見方も存在する。例えば、スパルタのサモス攻撃の際、同じくコリントスがサモスに敵意を持っていて、スパルタに協力しているのをペロポネソス同盟としての行動と見るものもあるが、他の同盟国がこれに加わった形跡は全くない点から見て、同盟の行動としては解釈し難い。ただ、コリントスでは僭主政が倒れたのち、寡頭政が成立し、それ以来スパルタに接近していることは確実で、何らかの形でスパルタとの同盟関係が保たれている。ペロポネソス同盟はもともと、スパルタがペロポネソスの支配を目指して結ばれたものであるが、事実上、メッセニアの完全支配とアルゴスの弱体化を軸にして、強いスパルタVを印象づけ、一方では、アルカディアとの友好関係を推進したので、一応、成功したのである。加盟は各国が個別にスパルタと同盟を結ぶ形をとっているが、テゲアの場合のように、なかば強制的に結ばれたところと、コリントス、エリス、シキュオンのように自由意志によって結ばれる場合があった。アナクサンドリダスの治世においては、本土での大きな軍事行動はテゲアとの戦

争とアルゴスとの戦争しかなかった。このことは、すでに前五四〇年頃には、大部分の国家がスバルタと同盟を結び終っており、ペロポネソス各国においてスバルタの優位が等しく認められていたことを示している。このスバルタを中心とする国家連合が同盟として行動するのはクレオメネス一世の治世になってからである。したがって、アナクサンドリダスはこの同盟関係を維持しているが、その治世の後半には、国家に直接の危険をもたらすような戦争もなく、比較的平和な時代であったといえよう。この平和は、いうまでもなく、キロンによる同盟政策の効果があらわれたものに他ならず、いうならば、ペロポネソスにおいて、スバルタ主導型の体制が確立していたことを意味するのである。アナクサンドリダスも、それ故この体制に不満があった筈はなかったが、また反面、この新しい同盟を有効に運用するという努力は行なっておらず、いわば現状維持に終始している。

総じて、アナクサンドリダスの治世の最も大きな特徴はエーゲ海上への軍事的進出であった。しかし、それに勢力を集中し得たのはペロポネソスにおける優位が確立され、しかも、それが安泰であったためである。したがって、キロンの同盟政策への転換は、結果的には、スバルタの海外進出を容易ならしめるのに役立ったことになる。しかし、これはキロン自身がそのことを狙ったものではなかった。キロンは、先に触れた如く、キュテラ領有を得策とは考えていなかったし、彼の政策を見ても、海外への進出という方向を読み取ることができない。ただ、キロンが対外政策を主導していた時代とアナクサンドリダスの時代とは、国際情勢に変化があったことを認めなければならない。少なくとも、キロンの時代までは小アジアの国家はギリシアから見て交易の対象であり、たとえエーゲ海沿岸の植民都市をその国家が支配下においても、その軍事力をもって海上に乗り出すことはなかった。したがって、小アジアの国家と友好関係を保つことも有益な場合が多かった。そこで、対外関係で最も気を配るべきは、むしろ、ペロポネソス

の諸国家との交渉という点にあった。ところが、アナクサンドリダスの時代になると、間もなく、小アジアにペルシアの勢力が及び、リュディア滅亡後の植民都市に対する姿勢からしても、また、スパルタがサルデイスに送った使節に対する態度からしても、ペルシアは少なくとも友邦とはなり得ないことが明らかになってきた。さらに、同国がバビロニアを征圧し、エジプトを攻撃する際に、海軍を使用したことは、やがて、エーゲ海を制圧し、直接ギリシア本土に接近する可能性を示すものと受けとられても不思議ではない。サモスへのスパルタの遠征も、両国の対立関係のみでなく、サモスがペルシアを援助する姿勢を示したことに對する危惧の念が作用しており、エーゲ海の有力な海軍国サモスとナクソスにスパルタが重大な関心を持ったのも、制海権をペルシアに与えまいとする姿勢に他ならなかった。それ故、貿易の相手国としての小アジアから、脅威の対象としての小アジアへと転換したともいえる。

以上見て来たところから考えると、アナクサンドリダスはキロンの同盟政策に支えられてはいるが、対外政策そのものについては忠実な後継者だった、とはいえないようである。

五

アナクサンドリダスのあとを継いだクレオメネス一世の誕生に至るまでの経緯については、ヘロドトスにしたがって、先に述べた。クレオメネスが長子であったので、そのすぐあとに第一の妻に生まれたドリエウスをさしおいて王位についたのは当然であろうが、ドリエウスはそれを不満として、植民する人々を連れてリビュアに向ったが、この植民は成功せず、のちシケリアのエリュクスへ向った。しかし、目的地に到達せぬうちに、ほかの争に介入し、結局、エリュクスへは行かなかつた。ヘロドトスはクレオメネスよりもドリエウスを高く評価し、彼がスパルタに留まらな

かったのは残念であるかのように叙述している（V. 42-43）。

クレオメネス一世が生まれたのは前五四五年前後であり、即位したのが前五二〇年前後であるが、この誕生の頃はキロンによる同盟体制ができあがり、また同時に、海軍による海外進出が始まる頃であった。そして、クレオメネスの治世の初期、前五一七年乃至五一五年にスパルタの海上支配は頂点に達したともいわれている⁽⁶⁾。はたしてしからば、クレオメネスの成長過程は、まさに、スパルタの海上支配の発展過程と一致していることになる。ところで、アナクサンドリダスの海軍重視という方針は、クレオメネスにも受けつがれているといえよう。先に、マイアンドリオスがペルシアのサモス攻略と共にスパルタに逃れ、援助を要請したが、スパルタはそれを拒否したことに触れた。これはクレオメネスの治世の初期であったが、彼が要請に応じなかったのは、この時点でサモスの問題に介入すれば、ペルシアとの対戦を覚悟しなければならないことを察知していたからである。彼ははずればペルシアとの対決もやむを得ないと考えていたようであるが、この段階でそれに踏み切るだけの準備はなされていなかった。そこで、クレオメネスはギリシア側の対ペルシア態勢づくりに努力するようになったと思われる。

しかし、クレオメネスの治世の初期かあるいは前王の治世の末期に当るナクソスへの干渉以降、スパルタのエーゲ海への関心は低くなったように見うけられる。それが直ちに、スパルタ海軍の劣勢を示すものではないけれども、前五一年頃以後はエーゲ海ではサモスとナクソスの海軍が最強を誇っていたようである。クレオメネスも海軍を重要視したが、その目的はアナクサンドリダスとはやや異なっており、エーゲ海やイオニア地方近海に進出するよりも、ギリシア本土の守備に重点を置き、海軍をギリシア近海に配備したと思われる形跡がある。

ところで、ナクソスのリュグダミスはアテナイと関わりあいがあった。すなわち、アテナイの僭主ペイシストラト

スが二回の追放をうけたのち、三度目に最終的に政権を獲得する際に、リュグダミスがナクソスから援軍を率いてこれに協力したのである。その後、ペイシストラトスがナクソス島を攻略し、ここをふたたびリュグダミスに統治させている (Hdt. I. 61 & 64)⁵⁾。ペイシストラトスの没年は前五二八乃至五二七年であるから、スパルタのナクソス干渉当時のアテナイはペイシストラトスの子ヒッピアス支配の時代であった。しかし、彼は何らリュグダミスに対する援助はしていない。また、スパルタ側もこの時点では、とくにアテナイと敵対することは考えていなかったようである。アテナイにおけるヒッピアス政権は必ずしも安定したものではなかった。そのため、ヒッピアスは政変の際の避難所としてランブサコスを考え、ランブサコスの僭主の子に自身の娘を嫁がせている。彼がランブサコスをえらんだ理由は、この僭主がペルシア王に影響力を持っているためであり、ヒッピアスはペルシアの力を後楯になし得る手がかりを得たのである (Thukydides VI. 59)。ただ、これは彼個人の問題であって、当時のアテナイに親ペルシア派が存在したか否かは、にわかに決定しがたい。一方、スパルタにとっては、ヒッピアスの親ペルシア的姿勢は好ましくなかった。けれども、アテナイの名家ペイシストラティダイと親密な間柄にあるスパルタ (Hdt. V. 63) としては、それだけでアテナイを攻撃するわけには行かなかった。そのスパルタをアテナイ攻撃に踏み切らせたのは、アルクメオニダイに買収されたデルフォイの巫女が、スパルタから神託を伺いにくるたびに、必ず「アテナイを解放せよ」との一言を加えたからである (Hdt. V. 63)。これにしたがって、スパルタは、まず海からアテナイへ向かった。アンキモリオスという人物に率いられた軍団がファレロンに陸揚げされたのだが、ペイシストラティダイはテッサリアの騎兵隊の協力を得て上陸したスパルタ軍を破り、アンキモリオス自身も戦死した。そこで、クレオメネス自身が海路をとらず、陸路で侵入してテッサリア軍を破り、僭主政に反対するアテナイ市民と協力して、ヒッピアスを中心とするペイシストラティ

ダイを屈服させ、アッティカ退去を命じてアテナイの僭主政が終った。しかし、スパルタのアテナイ攻撃は単純な僭主政打倒のためではない。けれども、僭主政が親ペルシアに傾く可能性のある場合には攻撃の対象になったようである。ヒッピアスにも親ペルシア的傾向があったし、リュグダミスの場合もペルシアへの傾斜を警戒したものと解することができる。

アテナイでは僭主政が倒れたのち、アルクメオニダイのクレイステネスと他家出身のイサゴラスの二人が政権を争ったが、クレイステネスは民衆を味方にひきつけ、部族制度の根本的改編を基本とする、いわゆるクレイステネスの改革を行なった。⁽⁶⁴⁾ かくして劣勢に立たされたイサゴラスはクレオメネス一世に救援を求めたので、クレオメネスはクレイステネスとその他七〇〇家族を穢れているとして追放し、イサゴラスによる寡頭政を実現させようとしたが、結局、アテナイ市民の抵抗にあつて成功せず、クレオメネスとイサゴラスはアテナイから撤退し、クレイステネスが呼び戻されて政権を担当した。以上の経過はヘロドトス（*V, 66-72*）に詳しいが、スパルタがそれほどまでアテナイに干渉したのは何故であろうか。スパルタにとっては、僭主政打倒後アテナイの政権を獲得するのは誰かが問題なのではなく、親スパルタ政権が成立するか否かが問題なのであった。前五一〇年頃から、クレオメネスはペルシアとの対決を意識してか、いわゆるペロポネソス同盟をペロポネソスに極限せず、中部ギリシアまでを含む連合体をつくり、自らがその覇権を握る体制を築きあげる方向への努力をはじめた。そして、その当面の目標はアテナイに親スパルタ的な政権をつくって、アテナイをその連合体（同盟）に加入させることであつた。⁽⁶⁵⁾ その手はじめに、ポイオティアのテバイ、エウボイアのカルキスとの関係を密にし、⁽⁶⁶⁾ 北と西からアテナイを圧迫する態勢を形成した。アテナイと共にスパルタが加盟させることを目指していたのはサロン湾内の海軍国アイギナであつた。⁽⁶⁷⁾ このアテナイとアイギナが加盟

すれば、中部ギリシアまでの連合体が形成され、スパルタを指導者とするギリシアの対ペルシア体制はほぼ完成することになる。したがって、スパルタはアテナイにこの連合体参加に同意し得る指導者の政権の樹立を求めている。スパルタが最初に協力したアルクメオニダイのクレイステネスとクレオメネス一世が対立したのはこの連合体参加問題が根底にあるように思われるし、次に、クレオメネスがイサゴラスを援助したのも、イサゴラスに連合体参加に積極的姿勢をとることを期待したからに他ならない。しかし、彼の政権獲得が不成功に終ると、遂に前五〇六年、軍事行動に移ることになる。アテナイの方ではイサゴラスが退去したのちクレイステネスが呼び戻されたが、スパルタとの対決は避けられないと判断して、ペルシアと同盟を締結しようと考えた(Hdt. V. 73)。これがアテナイとペルシアの直接交渉の最初であろうが、ペルシアと同盟を結ぶということは、要するに、ペルシアに臣従することであると知って、アテナイ側では同盟締結はとりやめた模様である。

ところで、スパルタのアテナイに対する軍事行動において、最も注目すべきはその軍隊がペロポネソス全土の軍であり、スパルタの軍隊だけではなかったことである。しかし、これがペロポネソス同盟軍といえるか否かは問題である。というのは、エレウシスでアテナイ軍と交戦する直前になって、コリントス軍が、この行動は正しくない、と判断してひきあげ、次いでスパルタにおけるクレオメネス一世の僚王デマラトスとその配下の軍隊もひきあげたので、他の軍隊もこれにならない、クレオメネス自身も軍をひかざるを得ず、したがってアテナイ攻略は失敗に終わった(Hdt. V. 75-76)。コリントスがひきあげた理由について、ヘロドトスは何も述べていないが、コリントスがアテナイに好意を持っていたことは明らかである(Hdt. VI. 108)。デマラトスの行動は、要するに、スパルタの二王の間の不一致を示すものに他ならないが、Klein⁽⁸⁾は、デマラトスがクレオメネスとの対抗上、アルクメオニダイに接近していたのでは

ないか、と推定している。いずれにせよ、アテナイをペロポネソスを中心とする連合体に入らせようというクレオメネスの意図は成功しなかったのである。しかし、とにかく、このアテナイ攻撃以前に意見の統一などが諮られるべき同盟国会議がなかったことは明らかであるし、全軍の指揮権がスパルタに委ねられてもいいない。おそらく、ヘロドトス(V. 91-92)の伝える前五〇五年の会議が同盟国会議の最初の例であり、それ以後の軍事行動においては、文字通り、ペロポネソス同盟軍ともいべきものが結成されることになる。⁽⁹⁾

ところで、このヘロドトスの伝える会議において、スパルタはこれまでと方針を変え、かつて、自らが追放したヒッピアス呼び戻し、アテナイに僭主政を復活させることを主張した。これは僭主政の下においた方が、スパルタに従順であり得る、という判断にもとづくようであるが、これは、要するに、アテナイを連合体に参加させるのが主目的であり、ヒッピアスとの間に何らかの了解があったのであろう。しかし、この企図はコンリトスをはじめとする同盟諸国の一致した反対によって、実現されなかったが、それがヒッピアスを、決定的に、ペルシア側に走らせることにもなった。⁽¹⁰⁾ また、この点から考えて、対アテナイ政策では、クレオメネスは僭主政打倒よりも、親スパルタ政権の成立に全力を注いでいたことが明らかとなる。

クレオメネスの対アテナイ政策は、要するに、これを征服して服属させることにはあつたのではなく、友好的関係を維持しながらも、スパルタを中心とする同盟に参加させることにはあつた。クレオメネスが中部ギリシアをも含めた連合体をつくるには、アテナイの参加は不可欠の要素だったからである。しかしながら、ペルシアとの対決という点から見た場合、クレオメネスをも含めて、スパルタの指導者達は軍隊を小アジア本土にまで派遣することに消極的であつた。すでに、前五四〇年頃、イオニア地方の諸都市が援助を要請した際に、それを拒絶している。(Hdt. I. 152)

のち、前四九九年頃、アリストアゴラスが同盟締結と軍事的援助を求めて来た際にも、クレオメネスはこれを拒否している (Hdt. VI. 49-51)。これは、一面において、ペルシアの勢力を十分知っており、援軍を送っても不利を免れないことを悟っていたからでもあろうが、他面、いたずらにペルシアを刺激して、これと敵対関係にはいることを避けようとする意図もあったと思われる。クレオメネスが、とくに、その防衛線をギリシア本土とその周辺の島々に限ったのも、ペルシアの脅威が本土周辺に及ぶまでは、あえて、これと事を構えたくない、という意志が働いたものと考えられる。クレオメネスは、ペルシアとの対決は不可避であるとしながらも、ギリシア側よりペルシア方面への積極的な進出、攻撃を目標ではおらず、ペルシアがスパルタの構想するギリシアの防衛線を越えた場合にのみ、明確な対抗姿勢をとる方針であった。したがって、海軍もアナクサンドリダスの治世の如き、海上への積極的行動ではなく、ギリシア近海の防衛線を越えた行動は行なわれず、防禦的態勢に終始しているかのようなのである。

アテナイの場合、すでにアリストアゴラスが援助要請に来た頃から、ヒッピアスの復位を強制するペルシアに対する反感により、ペルシアと敵対する姿勢を明確化しており、援助要請に応えて、イオニアに艦隊を派遣した (Hdt. V. 97)。すなわち、アテナイは、この時点でペルシアに対する軍事行動をおこしたのである。そのために、クレオメネスはアテナイを連合体に組み入れることを断念せざるを得なくなったものと思われる。スパルタとアテナイとの対ペルシア政策が一致しないことが明らかにされた以上、アテナイを連合体に加えることは好ましくないからである。スパルタが、はじめてペルシアの脅威を感じて行動をおこしたのは前四九一年乃至四九〇年で、アイギナがペルシア王に土と水を献じた段階でのことであるが、スパルタのアイギナ遠征も、実はアテナイに求めに応じたものであった。しかし、スパルタにとっても、アイギナはすでに同盟に参加しており、スパルタの考える防衛線内であるから、当然の行動だ

ったともいえる。

六

以上のようなクレオメネス一世の対外政策を見ると、アナクサンドリダスの政策よりもキロンのそれに近いように思われる。すなわち、防衛線を設定し、もっぱら外に対して防禦的な姿勢をとるというものである。キロンとの相違はアナクサンドリダスの治世に増強された海軍を防衛に加えたことであるが、これは、ペルシアを念頭においた措置として適切なものであったであろう。また、キロンの場合は、スパルタの安全を確保しながらペロポネソス内に優位を占めるところに眼目があり、そのために同盟政策が採られていたが、クレオメネスの場合は、中部ギリシアにまで、同盟政策によって、指導的な地位を拡大しようとしている。これはペルシアの登場という国際情勢の変化にもとづくものである。クレオメネスには、自身ギリシアの覇者としてギリシアの安全を確保すると共に、ペルシアの脅威が目前に迫った時には、スパルタを中心とする軍力でこれに対決しなければならないという意識があった、といえよう。ただ、事実上、前四九九年頃、アテナイがスパルタの意図とは相反する行動をとったため、クレオメネスの意図は、その時点では実現しなかった。

総じて、クレオメネスの対外政策は陸上においては積極的であり、その補助手段として海軍を利用しているが、ギリシア外に対しては消極的であった。ただ、キロンとの明らかな相違は僭主政国家に対する政策である。クレオメネスは、僭主政体であっても、それがスパルタにとって、有利か不利かによって異なった対応を示している。これらを総合して考えてみると、キロンによって決定されたと推定される外交方針が、きわめて忠実に、また、盲目的に踏襲

されていたとは断じられず、アナクサンドリダスもクレオメネスも、当然のことながら、国際情勢に対応して政策を決定している。ただし、征服を排して同盟を重視する、という点からは、大きく逸脱しておらず、この基本方針は、一応遵守されていると見てよい。けれども、これはスパルタ市民の安全を確保するだけの意味ではなくなっている点は注意を要する。⁶⁰⁾ 単純ないい方をすれば、アナクサンドリダスもクレオメネスもつねにベルシアの動向を見ながら、対外政策を決定していたのである。

以上、紀元前六世紀後半のスパルタにおける対外政策を中心に論を進めたが、クレオメネスの時代については、その前半しか取り扱うことができなかった。彼の外交政策については、アテナイ内部におけるふたつの対抗勢力とそのスパルタの対応が深くかわり合うばかりでなく、国内における僚王デマラトス、さらにはエフォロイとの対立乃至協力なども重要な要素となる。これらについては、ほとんど触れることができなかった。クレオメネス一世の治世約三〇年間についての彼の対内及び対外政策とそのかわり合いに関しては、機会を得て、更めて、詳細に論じ、本稿で不十分であったところを補いたいと思う。

註

- (1) 拙稿「第二メッセニア戦争とスパルタ」、『西洋古典学研究』XXI 一九七三年、所載二〇—二八頁。
- (2) アルカディアのみならず、エリス、ピサなどもメッセニアを援助している (Strabon VIII. 4. 10; Pausanias IV. 15. 7)。
- (3) テゲアはアルゴリス、ラコニア、アルガディア三地方の結節点に位置する。
- (4) 拙稿「スパルタの対アルゴス策」、『史林』五八一—、一九七五年、一一二—六頁(二〇頁以下参照)。

- (5) キロンの年代については後述。
- (6) ハウサニウスは III. 3, 5 つは、アギス家の王エウリュクラーテスとレオン二世にわたってテゲアとの戦争に成功せず、次のアナクサンドリダスに至ってテゲアに勝利を得たという。ところが、III. 7, 6 では、これと同時代と考えられるエウリュポンの家の王ブルキダモスとアゲンクレス二世の治世は平穩で、次のアリストンの治世にもテゲアに関する記事はない。
- (7) Huxley, G. I., *Early Sparta*, 1962, p. 69.
- (8) Klein, S. C., *Cleomens: A Study in Early Spartan Imperialism*, 1974, p. 90.
- (9) Die Fragmente der Griechischen Historiker, ed. F. Jacoby, 105 F I
- (10) Huxley, op. cit., pp. 69-70.
- (11) Huxley, op. cit., p. 70 ⁴⁵ Rylands Papyrus の「わかれた部分」 Ariston の名を正確に記述している。
- (12) Forrest, W. G., *A History of Sparta 950-192 B. C.*, 1968, p. 82 ⁴⁵ *gerusia* と同じである。
- (13) Huxley, op. cit., p. 149.
- (14) Huxley, op. cit., p. 71.
- (15) Forrest, op. cit., p. 83.
- (16) Klein, op. cit., pp. 47-48.
- (17) Forrest, op. cit., p. 71; Tomlinson, R. A., *Argos and the Argolid. From the End of the Bronze Age to the Roman Occupation*, 1972, p. 84.
- (18) 前掲『史林』五八一―一所載拙稿「二二―二三頁参照」。
- (19) 前掲『史林』五八一―一所載拙稿「一八頁以下参照」。
- (20) Cook, R. M., *Greek Painted Pottery*, 1960, pp. 95-99.
- (21) Huxley, op. cit., p. 63.
- (22) Huxley, op. cit., p. 62; Forrest, op. cit., p. 72; Hooker, J. T., *The Ancient Spartans*, 1980, p. 74.
- (23) Toyhbee, A. J., *Some Problems of Greek History*, 1969, p. 183 ff.
- (24) Klein, op. cit., p. 74.

- (25) Hammond, N. G. L., *A History of Greece to 322 B. C.*, 2nd Edition, 1967, p. 168.
- (26) Huxley, op. cit., p. 70.
- (27) Forrest, op. cit., p. 79.
- (28) 本来はメソポタミア文明圏を画している山脈である。東側がブルゴリス、西側がラコニアに属していた。
- (29) Toynebee, op. cit., p. 183; Klein, op. cit., p. 77.; Cartledge, P., *Sparta and Lakonia. A Regional History 1300-362 B. C.*, 1979, p. 140.
- (30) 44 Klein, op. cit., p. 72 はキタテラ領有をテレニアティスの戦よりも前⁴⁴としてゐるが、⁴⁵したがひ難い。
- (31) Klein, op. cit., p. 75.
- (32) Huxley, op. cit., p. 73.
- (33) Toynebee, op. cit., pp. 185-187.
- (34) Huxley, op. cit., p. 73.
- (35) Klein, op. cit., p. 72.
- (36) Klein, op. cit., p. 77.
- (37) スムルタの陶器の流布状況から見ると、エジプトではナウクラティスと交易があったことがわかる。
- (38) ³⁷ *επιγραφές* ³⁸ *Ναυκράτιδος* に記されている九都市は、いずれも小アジアに所在するものである。
- (39) Cook, op. cit., p. 98.
- (40) タロインスの登位は前五六〇年乃至五五七年である (Hogarth, D. G., *Cambridge Ancient History. Vol. III*, p. 518 参照)
- (41) Hogarth, op. cit., p. 526.; Gray, G. B., *C. A. H. Vol. IV*, p. 10.
- (42) Huxley, op. cit., p. 73.
- (43) Cook, op. cit., p. 78.
- (44) Klein, op. cit., p. 77.
- (45) エジプト最後の王はアマシス(前五二六年死)の子プサメティコス三世であった。
- Hall, H. R., *C. A. H. III*, pp. 302-303.

- (46) これらの同盟関係については、ヘロドトスに記載がある。すなわち、I. 77 にリュディア及びパピロンとの同盟、II. 181 にキムネとの同盟、III. 39 にサモスとの友好関係が見られる。
- (47) How, W. W. & Wells, J., *A Commentary on Herodotos*. 2 vols, 1936, Vol. I, p. 267; Hooker, op. cit., p. 147.
- (48) <ロドトス(III. 39)によると>「五十艘船一〇〇隻、弓兵一〇〇〇人を擁していた」といふ。
- (49) たとえば、スパルタがリュディアへ贈ったクラテル、エジプトがスパルタへ贈った鍔は、いずれも輸送中にサモス人によって掠奪されている(Hdt. III. 47)。
- (50) ここにいうメッセニア戦争がいつのものを指しているにせよ(次註⑤参照)サモスに僭主政が成立する以前であることは疑ない。したがって、反ポリュクラテス派(反僭主派)がこれを持ち出したのである。
- (51) このメッセニア戦争は一般に第二メッセニア戦争と考えられているが、この戦争は海軍とは関係なさそうである。むしろ前六〇〇年頃のピュロスやリオンの征服の際と見るべきではないであろうか(Huxley, op. cit., p. 74 参照)。
- (52) ポリュクラテスにとっては、国内の反抗分子の追放であったとしても、国際的に見れば、サモスがペルシアを援助していることになる。
- (53) Huxley, op. cit., p. 74.
- (54) Plutarchos, *Moralia* 236D.
- (55) Huxley, op. cit., pp. 74-75.
- (56) エウセビオスの *Chronographia* (I. 225) に、イオドロスから引用した *Thalassocracy-List* と通称されるものがある。これはトロイアの陥落からクセルクセスのギリシア侵入までの間に、エーゲ海の制海権を握っていた国とその年数とを年代順に並べたものである。このリストによると、ラケダイモンはサモスのあとをうけて制海権を握るが年数は二年間で、そのあとナクソスが一〇年間、エレトリアが一五年間、アイギナが一〇年間続いて、クセルクセスの侵入(前四八〇年)となる。したがって、前四八〇年から逆算すると、スパルタ(ラケダイモン)の年代は前五一七年から前五一五年となる。なお、Jeffery, L. H., *Archaic Greece. The City-States c700-500 B. C.*, 1976, pp. 252-254.; Moshammer, A. A., *The Chronicle of Eusebius and Greek Chronographic Tradition*, 1979, p. 167. など参照。
- (57) Klein, op. cit., pp. 122-123.

- (58) Cartledge, op. cit., p. 145.
 後出。註(61)参照。
- (59) さきの反ポリュクラテス派の場合と同様にサモスを追われたものがスパルタに逃れてきて援助を請うというのは、当時スパルタがサモスに匹敵する海軍国とされていたことを示している。
- (60) 多くの史家はクレオメネス一世の即位年代を前五一九年以前においているが、Hooker, op. cit., p. 148. は前五一七年よりもおそくはなごという表現を使い、また Forrest, op. cit., p. 85. は前五二〇—五二六年と幅を持たせている。
- (61) Toynebe, op. cit., p. 243. だけは即位年代を前五五〇年頃としている。
- (62) Moralia 859C-D.
- (63) Hooker, op. cit., p. 146.; Huxley, op. cit., p. 75.
- (64) Huxley, op. cit., p. 75.
- (65) Politika 1315b.
- (66) ナクソスのリュグダミスはスパルタに攻撃された際にはヘルシアの援助があると期待していたという (Huxley, op. cit., p. 75. 参照)。
- (67) Plutarchos, Moralia 292B.
- (68) Jones, A. H. M., Sparta, 1967, p. 45.
- (69) ヨウセビオスの Thalassocracy-List によれば、この時期にスパルタが制海権を握っていた。
- (70) アリストテレスの Athenaion Politeia XV. 2-3 にも、リュグダミスに関する同様な記事がある。
- (71) テッサリア人は前六世紀前半にフォキスを支配し、さらに、ホイオティアに侵入してここをも支配する勢を示し、ヘイシストラテイダイ支配下のアテナイと同盟を結んでいった (Buck, R. J., A History of Boeotia, 1979, p. 116. 参照)。
- (72) ヒッピアスの親ヘルシア的傾向については後述。なお、註(80)参照。
- (73) この改革の詳細やその意義については、本稿の主題と直接は関係がないので、ここでは触れない。
- (74) 実際に、アテナイが、一時的に同盟に参加したという見解もあるが、確たる証拠はない (Klein, op. cit., pp. 341-348. 参照)。
- (75) Buck, op. cit., pp. 116-117. によると、テバイとカルキスがアテナイを攻撃するためにスパルタと結んだのは前五〇六年だ

という。

- (77) アイギナが同盟（連合体）に加わった時期は確定し難い。アイギナは以前からアテナイに敵意をもっていたが、のちにテバイと同盟すると、優勢な海軍をもって、前五〇三年にアッティカに侵入している（Hdt. V. 89）。しかし、それに関連して、スバルタは全く動いていないから、この段階ではアイギナとスバルタとの同盟関係は、いまだ存在しなかったと思われる。しかし、前四九四年のスバルタのアルゴス攻撃にはアイギナも加わっている（Hdt. VI. 92）。したがって、前五〇三年から前四九四年の間のある時点で、アイギナも同盟（連合体）に加入したのであろう。なお Klein, op. cit., pp. 118-119 & pp. 181-182. 参照。

- (78) Klein, op. cit., p. 176.

- (79) Klein, op. cit., pp. 183-184. なお De Ste. Croix, G. E. M., *The Origins of the Peloponnesian War*, 1972, p. 339. を参照。

- (80) ヒッピアスは依然としてアテナイへの復帰をのぞんでおり、その協力をペルシアに求めている（Hdt. V. 96）。そして、前四九〇年のペルシア軍のアテナイ進攻に際して、ペルシア軍を誘導するために同行し、もし、アテナイがペルシア軍に占領されたならば、自らアテナイの支配者に返り咲くつもりであった（Hdt. VI. 107-109）。
- (81) クレオメネスの際の同盟政策はギリシアの対ペルシア体制を確立するための一手段となっている。